

# 三河アララギ

平成二十八年

八月号

第六十三卷 第八号



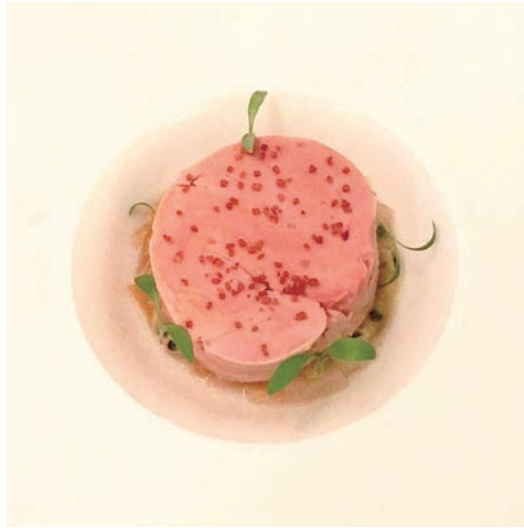
ニューヨーク日記(118) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

NOREETUH February 27, 2016

## Blue Shoe Diaries

---



今ニューヨークでハワイアン料理がちょっと注目されています。スパムむすびばかりでなくオシャレなレストランでも。ミシュランレストランで料理していたシェフが自分のお店を持ったのがその中の一つ、去年開いたnoretuhって言うイーストビレッジのお店。モダンな感じで食べるまで味がハワイアンって気付かない感じ。面白くって甘さをうまくバランスするんだなあって思った。例えば、あん肝のトルシヨンも甘いハワイアンパンが付いてきたり。

---

Hawaiian food is hot right now in New York. And one restaurant that is getting a lot of attention is noretuh in the East Village. The chef and wine director are both Per Se alumni so you see high-end refinement in the dishes and approach to the food. One of the highlights for me was the monkfish liver torchon served with toasted King's Hawaiian bread. Nicely spreadable on the bread, what's described as passion fruit gelee tasted like mandarins to me. And highlighted by a sprinkle of karasumi or bottarga? That made the dish for me. Yum!

# 目次

## 第六十三卷第八号(通卷七五二号)

表紙・蘇鉄そくてつ

今泉 由利 (1)

ニューヨーク日記(118)

Blue Stone (2)

黄素馨の門

御津 磯夫 (4)

歌集「はゞきくさ」

大須賀寿恵 (5)

歌集「草々」

今泉 米子 (6)

年々歳々

岡本八千代 (7)

紫草

今泉 由利 (8)

火星

弓谷 久子 (9)

沙羅の木

内藤 志げ (10)

新緑の山

林 伊佐子 (11)

腕相撲

安藤 和代 (12)

苗床

鈴木 孝雄 (13)

重心移動

足立 晴代 (14)

地しばり

阿部 淑子 (15)

再び

伊藤 忠男 (16)

玉姫祀る

白井 信昭 (17)

大磯

森岡 陽子 (18)

衣替え

清澤 範子 (19)

水無月の雨

近藤 映子 (20)

八千夜

杉浦恵美子 (21)

初成り

山口千恵子 (22)

梅雨入り

夏目 勝弘 (23)

歌集「夢のつづき」

水上 信子 (24)

童謡『ふるさと』の海は青色

高橋 育郎 (25)

『いこよせ』

いーはこぶ

森 厚子 (26)

### 現代学生百人一首

東洋大学

長谷川 拓 (28)

甲原 佑真 (28)

芳村颯太郎 (28)

辰口 紗帆 (28)

大室 花香 (29)

田口 愛梨 (29)

齋藤 温子 (29)

関根 奈央 (29)

重野 善恵 (30)

今泉 由利 (30)

松本 周二 (30)

米田 文彦 (30)

柳田 皓一 (30)

山元 正規 (31)

山迫 京子 (32)

森岡 陽子 (32)

田中 清秀 (32)

山崎 俊子 (26)

三田美奈子 (26)

水野 絹子 (26)

牧原 規恵 (26)

稲吉 友江 (27)

鈴木美耶子 (27)

吉見 幸子 (27)

牧原 正枝 (27)

石田 文子 (27)

楽しい時間(45)

鮫島 満 (44)

『楽しくマナー』(14)

山本紀久雄 (46)

『歴代天皇御製歌』(六十一)

辻 照子 (48)

『歴代天皇御製歌』(六十二)

貫名海屋資料館 (50)

『文化のみち二葉館』展示

貫名海屋資料館 (51)

『水魚のことから』(187)

岡本八千代 (52)

漢字の遊び男と女

岡本八千代 (55)

ことのはスケッチ(45)

夏目 勝弘 (56)

編集室だより(二〇一六年 六月)

今泉 由利 (57)

野菜の花(2)

三河アララギ (58)

お知らせ・三河アララギについて

鈴木 孝雄 (59)

(60)

黄素馨の門(昭和四十一年〜昭和四十四年) 御津磯夫

意味なきが如くに冬の雨となる九品佛を入りて拝まむ

ゆくりなきことといへども娘ありてけふ菘翁の裔すえにつらなる

幼くて貫名海屋の名を知れり曾祖父となる娘嫁ぎて

夜の虹を仰ぎし空をゆびさして小さき峡の冬のひるまへ

船魂の舳先も臚もつかへまつり御津みとのみなとに神つきたまふ

池ふりてあせつつ御津の大神の石船高し苔白くして

いにしへの御船の泊てし湊ぞとわが生よをかけてひとりこゑよぶ

朝のくもり夕べの曇り一日のみじかきけふもうろうろとする

引馬野を御津の御馬とわれいひて三十二年のときわれにすぐ

引馬野考世にいだしつつ時もおかずおもひこがる四極しはつの山に

歌集「はゝきくさ」II

大須賀寿恵

生理落葉などの専門語教はりつつFBCの審査に加はる

花すぎし八ツ手の払葉に打つ雨を聞きつつ眠りに入りたるらし

昏の庭に楓の実生拾ひ来て平たき鉢に並べ植ゑたり

赤外線のことたつに足を温めをり黄に咲きつづく庭のアイリス

ビール麦のくれなるの芒光りつつスモン病足ひきづりてゆく

背の骨のまたくさるのか疼ききてわが髪の毛の逆立つおもひ

四日の月落ちてゆきつつくりやにて明日着む黒きセーター洗ふ

からくずしのままに幹きし土の上に一羽の雲雀背のびして鳴く

限りなくしげれる藪に入り来れば枯木倒ししのうぜんかづら

痛む背を椅子のもたれに押しつけてまなこ閉ぢをりしばらくのあひだ

歌集 「草々」

今泉 米子

トベラの葉搓よれて乾けるこの島に舗装して土を踏むところなし  
ほのぼのとダチュラの咲きをり末の子の結婚式を了へて帰りぬ  
那覇空港を発ちくる頃か夕かげに庭のダチュラの花かをるなり  
六百巻の書寫大般若況經を拝まむとまひるひそけきバス停にゐる  
高々と今年終りの花あかりダチュラ匂へる厨を閉す  
ひるまへの診察すみぬメタセコイヤの黄葉は窓に迫れるごとし  
俎のまま持ちゆきて夫に見する白き仔被へる仔持ちわかめを  
新しき年たちて常の日となりぬ赤白ワインを横はへて置く  
黄素馨のまつはる中に修繕のやうやくなりぬ庭園燈点く  
庭に出づるいとまなかりし幾日に花は散りゆき春さだまりぬ

## 年々歳々

蒲郡 岡本八千代

年々すぎ歳々老いて未だわれにあるらしきかな希望のごときもの

「文化のみち二葉館」へもゆけずして降りつ止みつの六月の今日

やかましきテレビより逃げて書屋に来ぬだあれもゐない吾のみの部屋

けふよりは筆もて文字を書かむとす何もかもわが自我流にして

墨すれば墨のほひのかすかして久々におもふ墨くれし君を

墨の名の「名花十友」もいつしかに「友」の字消えて斜めに減りをり

風吹かば風にも負けてよろめけり雨降らば雨の雫の寂し

君ありて吾もありつつ共々に自然じねんほうに法爾に従ふころ

一日中くもり空にて暮れてゆく雲の中より鳥の啼く声

いつしかにすりておきたる墨の海干あがりてをりまた水注ぐ

## 紫 草

東京 今 泉 由 利

帯曲輪不浄門とも呼ばれしと今日は入りゆく平川門へ

夕刻は蛍飛び交ふ苑ならむホタルブクロの俯きて咲く

高々と水面突き抜く黄の花地下茎白きに河骨こうほねとぞ

淡々き紫色の集合花紫式部と大樹に寄りぬ

辿りゆく御苑の道に咲き初むる萩尾花桔梗撫子葛女郎花藤袴

ベランダに身を乗り出し探いしをるしし座いの方の今日の木星

武蔵野にかつて群ると紫草むらさきを記憶に探すその白き花

鉢植の紫草を引き抜かれわれに見せ示むその太き根を

咲き継ぎてつひに天辺黄の花待宵草に今日の三日月

ウバユリの咲きいだす頃いざゆかむ目黒国立科学植物園



## 火星

豊川 弓谷 久子

大接近のあれが火星と子が指しぬ暗き夜空の赤き星ひとつ

老いの目をこらして見たりはつきりと赤き星見える火星が見える

梅雨晴れの今日は伊良湖の空と海ホテルの窓より心ゆくまで

鷹ならぬ鳶が舞ひをり悠々と伊良湖の空に卷雲白し

神島が答志島が真近く見えて彼方は鳥羽か波も静けし

潮騒の舞台となりし神島か映画の一こま心をよぎる

初めての体験となる農園に我が手に剪りしメロンの重し

音楽の如く聞きをり真夜中に空缶を打つ雨だれの音

遠く離れて暮してゐても心にかかる我に一人のはらからなれば

残りゐる花剪りつめたり我が好む紫陽花の名は隅田の花火

## 沙羅の木

豊川 内藤 志げ

小刻みに葉をゆらしつつ霽くする雨によく咲く沙羅を眺むる  
沙羅の木の丸まる蕾を眺めゐて葉かげに一つ花見つけたり

沙羅の木は雨を好むか雨の日は窓辺に腰かけその木に真向ふ  
落ち花を掃き寄する間にまた一つ真白き沙羅が芝生に落つる

暮れ方にわれを車に誘いざないて玉蜀黍の稔りを確めよと

雨降らぬ朝早くより夫と嫁玉蜀黍の畑に出でゆく

わが畑の西瓜トマトの初物は鴉の二羽が味見するなり

二重三重に西瓜に網を廻らせり今日も鴉がアンテナに止る

わが行けば何処からか来る鴉二羽憎くきもあり愛しくもあり

湯上りに小窓より望む本宮の山青黒くして姿全けし

## 新緑の山

岡崎 林伊佐子

樨の木の若葉かがやく山道をひとり登りて散策たのしむ

若き日に蕨を摘みし裏山も杉植林に日影となりぬ

荒<sup>あ</sup>れはてて牛舎を覆ひしつたの蔓かべに張り付き命を保つ

幼な名に呼びあう友も高齢となりて子の住む町に出で行く

林業に生計たたず村人も富裕の差はなく年金生活

二階より見渡す里の集落は空家<sup>あきや</sup>並べる時代の変遷

若竹の伸びゆく早き竹林五月の風に若皮<sup>かわ</sup>を脱ぎ行く

老いて行く証と言うらむ年毎に人に抜かれて街を歩みぬ

町に住み借地畑に働きて土に親しむ老いの楽しみ

西空のあかね雲みて一日の農仕事おえ帰宅を急ぐ

## 腕相撲

豊川 安藤 和代

濃淡の緑もくもく石巻山吾もくもく力わきくる

高三の孫の教科書ひもとけど理科か数学か解らず閉じたり

夕焼けが静かに消ゆる空にまだ雲雀の元気な声の聞こゆる

気弱になりし夫を誘いて腕相撲勝たせる術も覚えて久し

昨日五千今日は八千歩まんと雲雀の声に合わせ腕振る

水張田は夕焼け雲を写しおり明日は早苗が風にそよぐか

ベッドから赤黄白のすかし百合朝あさ見では夫はほほえむ

田蛙の賑やかな声とおだやかな夫の寢息になぜか眠れず

夕暮れて鶉の声高々し吾も呼びたき友のありたり

立葵次つぎ咲きて蕾三つ高きに残し梅雨入りとなる

## 苗床

沼津 鈴木孝雄

東郷より奥駿河湾を見つつ歩く霧に包まれ淡島佇む

大雨で狩野川の水真つ茶色湾に流れて山には戻らず

革新的白内障の治療法開発ドクターの人柄しのばる

ソラマメの収穫終えて土を鋤くカナブンの幼虫棲みつきはべる

タマネギの茎を倒して告げている梅雨は近いぞ収穫時期と

モロヘイア苗密集で間引き作業必要ながら忍び難きかな

根腐れかとあきらめかけたその朝にやつと芽を出す生姜の種根

苗床の一本一本掘り起こし溝に立て植える幼き白ネギ

実家より持ち来たりたる千両の実畑の角にやつと芽吹く

真夜中の風雨の音に目が覚める畑気になり朝まで眠れず

## 重心移動

東京 足立晴代

くちなしの白き一輪ひらきたり去年は咲くを忘れをりしか

小ぶりなる紫陽花庭にたゞずみてつわぶきそえて床の間におく

春来たり花々競い様々の色どりありて生々咲けり

色入れるぬり絵の楽しみ我忘れ時過ぐるのも一瞬なり

若人と共に語りてさわやかなスポーツ大会楽しく過せり

車イス乗りてカーブに右左重心移動中々労働

垣根よりこぼれるばかり咲き乱れ道辺に香る赤きばら

久しぶりライトアップの熊本城老いも若きも喜びひとしお

梅雨空の晴れ間に強き陽ざしあり汗ばむ肌におどろきたり

かすみたる眼み開きて何事も見えたる如く過す吾なり

## 地しばり

横浜 阿部 淑子

道端のわずかな土に地しばりは玉つゆのせる葉を支えおり

認知症や歩けぬ人もロボットの介護の力で人は自立へ

お年寄りのニヤリ・ホットの取り組みで人々和み明るなごい施設

大地震の被害の手当届かぬにあとから続く洪水の害

黒雲の迫る気配に雀等はチユクヂユク鳴きて庭先に集う

## 再び

大阪 伊藤 忠 男

浜名湖に集うわが友生き生きと語る言葉に我勇氣得る

夕日受け輝く湖面水かがみ写るわが顔見間違うなり

卒業後五十五年と言ったとて面影きつと残るはずなり

自転車の君はどこかと探してもその顔見えず少し寂しや

あれ君は昔背丈が同じなり今ははるかに高きは何故か

また次と手を振る友に誓う我元気な姿この次もまた

押入れの片付け進まぬこれはあのあれはあの日の母の思い出す

この写真入学式のその日かな母の「こおり」に我昔あり

そのままと願い手に汗声枯れるトップを走るわが後輩に

わが母校文武両道夢叶う久しく待ちた五輪の選手



## 玉姫祀る

豊川 白井信昭

海近くR247走り継ぎ二時間余り師崎の港に

北東に知多と三河湾西南に伊勢湾を望む要衝の地と

先端のひと処にして小堂あり玉姫祀る羽豆岬かな

海よりの南風に草も木も同じき向きに傾き靡く

岬みの崖下に寄す磯波の風光明媚の羽豆神社あり

み社の本殿前入り口に幣に巻かれし矢欠石ひとつ

岬より海を挟みて伊良湖岬渥美火力の煙突そびゆ

紺碧の海に広がる日間賀島佐久ノ島篠島遠い景色

紺碧の三河の海の島辺ゆく小船いく筋白い航跡

往古より海の安全と見晴るかす風景絶佳心ゆくまで

## 大磯

東京 森岡陽子

冷房の良く効く老舗の甘味屋で粒かこしかの餡で激論

雷鳴と光に犬達尾を下げてそはそは我のひざを取り合う

朝一番ランチを挟み午後一番梯子で楽しむ映画鑑賞

横浜のシルクホテルに添ひたつる今も残れる桑の木一本

点心とふかひれスープの昼食は横浜港のクルージングで

名も知らぬ島より椰子が流れ来し大磯にあり藤村梅のてら

真夏日の寺に一群白撫子緑陰にしてそこは涼風

お隣りに舟の形の吊り忍ぶ雀は下り来て根茎ひっぱる

海よりの風強くして立葵大磯町の別荘に咲く

半月は現れ出づるまた隠れ流るる雲と一緒に動く

## 衣替え

春日井 清澤 範子

低気圧通過するとして肌寒し故母ははのブラウス重ね着はぞする

衣替えの今日は晴天梅雨の晴れ間涼風カーテン大きくゆるる

衣替え待たず学童は家の前半袖を着て並び登校す

聴きづらい夫とはなりぬ小声にて吾はメモ持ち筆談をする

増築をしたる部屋の出窓より朝陽まぶしく床の間に届く

新緑の雫したたる散歩道公園巡り足どり軽く

廊下開ければカーテン大きく風はらみ歌稿書くにも爽やかにして

爽やかに頬なづる風吹き過ぎてわがブラウスのリボンひらひら

茗荷の芽は煉瓦にて囲みし菜園の外に根を張り葉を広げたり

堤防の桜木緑の色深く走りの雨に緑の雫

## 水無月の雨

名古屋 近藤映子

臯月末真夏日続き大急ぎ夏着を出して羽織りたり

電話にて麗美のハシヤグ声息子の話を繰返し聞く

吾三人の孫に恵まれし早速仏壇に報告の線香を上げ

六月はつゆ時なのに水無月と言うはをかしと現代人は

どんよりと朝より空は雲低く降るやら降らぬやら

重症筋無力症のわが右手検診ごとに治らぬ確認か

六月二十日夜半の雨は見下す川の濁流を成す

シシトウの初成り三ヶ仏壇にベランダ育ちとピカピカそなえ

この右手何をせずともしびれ痛つゆ時の今特に強いか

昨年食べし西瓜の種を鉢に蒔き芽を出し伸びて実花も付け居る

## 八千夜

蒲郡 杉浦恵美子

この道は夫の言ひ付け守らねば廻り道して危険の回避

運転の苦手な我とて夫の教へ後生大事に守りて居るよ

八千夜過しし豊橋今は早滞在短き街となりたり

五年経て豊橋今は過去の街淋しき追憶誘はる故に

暮れなずむ梅雨の晴れ間に繰り返し鳶鳴きをり今日は夏至の日

夏至故か日の入るまでのこの一刻まだるつこさよ鳶鳴きをり

夏至の日は身近に夫が居るごとしビール片手に語り続けし

東浦何時の間にやら迷ひ道巨峰畑の丘陵続く

木漏れ日よ夫が何処かに居るようだ鍋倉高原ブナ林の中

いつもとは異なる街角曲ったらこんな処に可愛い甘味屋

## 初成り

豊川 山口千恵子

白妙のダチュラの花を思ひつつ未だ芽吹かぬ根元に寄りぬ

六月になりても芽吹かぬわがダチュラ根元の土を指に掘りみる

ちちははの一世を思ふ時のあり今年も十薬木下に白々

竹串で一つ一つのへたをとる厨にただようふ梅の香の中

初成りの少し曲れる胡瓜もぐみどり色濃くとゲトゲのあり

フライパンに割り入るる卵二つなり今日もはじまる二人の暮らし

わが畑の胡瓜一本きざみゆく香のすがし切口青々

スーパで貰ひしパンフレットたよりにし梅ジャムつくり試みてみむ

小雨降る植田の中の道をゆく貸したるわが田も植ゑられてをり

くろ土より掘り出すジャガ薯白々と集めて入るるコンテナ二つ

## 梅雨入り

豊川 夏目勝弘

とりの声に目覚めてふと思ふありはつかな卵を売りにし日々を

半年のネムリより覚めしネムの木に黒みをおびし緑の新芽

部屋の闇に目覚めてしばし予定せし明日の庭師の手順めぐらす

平凡な日々の続けりまだまだつづく生きあるかぎりつづきゆくこと

目覚めある闇を短かく轟かせ夜間訓練のF15過ぐ

梅雨となり西施がねぶを思ふ雨庭道陰する我がネムの木は

石垣のはつかひまな隙ひまに小さき花キキヨウソウの深き藍色

庭なかの雑草引きゆく花つけしキキヨウソウを残してゆきぬ

キキヨウソウまたユウゲンシヨウはアメリカより雑草となりはて五十余年か

ネムの花に思ふ梅雨の雨静かあと二三日にて花の咲くらむ

歌集 「夢のつづき」 水上信子

淡き色かさねて春はたけなわにわが身を何処におきて眺めん

眼の上はほのかに暗き空模様力を抜けと医師の声する

月蝕を穴の底よりながめたるごとき暗闇手術のさなか

手術後のあさき眠りの眼の中にあまたの顔がたゆたいてあり

光るもの透明なるもの青きもの浮遊する海眼の中に見る

細き莖ロシアたんぽぽ黄の色のはかなくゆれて思い出いずこ

つややかにみどり色こくみなぎらせ梅の若枝春を待ちおり

骨酒を鮎のかたち器にて供され旨し旨しと言うのみ

湖をとりまく山にわが春の淡きいたみを重ねて眺む

トンネルを二十六数え県境越中越後は海に切り立つ



# 童謡 『ふるさとの海は茜色』

高橋育郎 作詩

ふるさとの海 新潟の

寄居の浜は 若き日の

思い出多く 忘れまじ

沈む夕陽の 赤きこと

釣瓶落としの 早きこと

われ感嘆の声あげぬ

ふるさとの海 なつかしや

かえらぬ日々の せつなさよ

白秋訪ねし ぐみ原は

夕陽に赤く 照り映えて

向こうは佐渡よ 島の影

思い出語ろう 友来たれ

ふるさとの海 いま遠く

遥かかなたに 去り行けど

赤い夕陽に 頬染めて

なぎさにたてば 涙する

茜の海よ ふるさとよ

鏡の如き 日本海

『いじよとせ』

(西浦公民館 いーはとぶ)

新緑の「トヨタフォレスト」散歩する午後の吾らに鯉の寄り来る  
去年までは独り今年は二人にて「ひまわりの湯」に話は弾みて

森 厚子

ペランダに四つの小さなコイノボリ風にふかれて楽しげにみゆ  
白銀のチガヤの花穂食みてみぬ幼き頃のあの甘き味

山崎 俊子

初夏の風吹きわたるマリナーにすがしげに並ぶよ真白きボート  
何処へゆくあてもなければど亡き夫の時計をはめて駅までの道

三田 美奈子

春の来て両手いっぱい菓子抱へ町走る孫よ今日は弘法会  
天平の衣を風に翻し奈良の街往く若人清か

水野 絹子

古希を過ぎ足腰の衰へ覚えたりわが生活につひに変化が  
小学生の孫の運動会を見に来たりつひに組立体操は無しに

牧原 規恵

年毎に体の衰へ感じつつも今日はパステルカラーのシャツ買ひにいく  
遠々の海は風たり紺碧の淡きに広がる瀬戸内の海

稲吉友江

わがスカーフに春の疾風はやちの吹きてくる撞木町しゅもく歩くときのゆれゆれ  
二人ならいつもは広きわがりピング連休のけふは孫らと鉢合せ

鈴木美耶子

菖蒲湯に今宵は浸る幼と我と湯けむりの中に二人の笑顔よ  
ズタズタの心のままの我なれど夫の優しき眼に包まれ

吉見幸子

石垣はおのおのの色になりにけり百余年ぶりの手直し決める  
塀こはす金槌の音もわづかにて畑越しに見ゆ塀なき我が家

牧原正枝

トッキョキョカキョク聞きなれぬ声藪の中不如帰鳴くか春も過ぎつつ  
路地隅に山吹き咲けり八重の花黄色鮮か道漕おもふ

石田文子

## 現代学生百人一首

東洋大学

バッグからいつも出てくる単語帳付箋が消えて自信がついた

東洋大学附属牛久高等学校三年(茨城県)

長谷川拓

なにげない言葉一つにトゲはえていじめと気付かぬ言葉の怖さ

深谷市岡部中学校二年(埼玉県)

甲原佑真

諦めて丸めて捨てた過去の夢皺を伸ばせばまだ叶うはず

埼玉県立朝霞高等学校一年

芳村颯太郎

トルコテロ姉の帰りを心配す携帯持つ手気づけば滑る

埼玉県立朝霞高等学校二年

辰たら口ぐち紗帆

来年は与えられてる選挙権進路選択も出来ぬ私に

埼玉県立桶川高等学校二年

大<sup>おお</sup>室<sup>むろ</sup>花<sup>かな</sup>香<sup>か</sup>

ホームラン汗が涙に変わって土に染みこむ夏の思い出

埼玉県立川越総合高等学校三年

田口愛梨

直前の緊張こらえ深呼吸ノックで始まる面接本番

埼玉県立坂戸西高等学校三年

齊藤温子

消えてゆく地元の名残りの秩父弁「せやあねえよ」は祖母のぬくもり

埼玉県立松山女子高等学校三年

関根奈央

『俳句』

小糠雨雫となりて額の花

重野善恵

近付きて火星煌々梅雨間近

十薬や夜の帷に灰白し

柿の花ぼとぼとぼとぼと落ちにけり

今泉由利

咲きのぼるつひに天辺花葵

沢山の寂しさつのる夏薊

青柿や豊かに次郎の形をして

松本周二

筒に蓋秘密めきたる落し文

大夕焼け河口に跳ねる魚高し

夏蝶や堂々巡りの露地小路

米田文彦

切れぎれの若き日の夢明易し

水を飲む喉まつすぐや夏旺ん

一日の空白ありぬまず昼寝

柳田皓一

空梅雨の雨の匂ひや傘をもつ

集まりのいつもの大や生ビール

藍涼し組市松の模様なほ

山元正規

この街を終の住まひに青簾

表札の薄れし文字や柿の花

万緑やノルディックウォークの長き列

山迫京子

変りなきことのしあはせ額の花

紫陽花の蕾綻ぶ雨あがり

緑蔭やひと時降ろすエコバック

森岡陽子

端棒は八百屋の親父祭足袋

石垣に尾のない蜥蜴逃げ失せる

灯台の白より白し雲の峰

田中清秀

初夏やジャカラダの花散り敷きて

夕涼み黄金に光るさざれ波



塩舐めて領いてをり夏大根

植村公女

夫吾をまたいでゆけり青時雨

スキップの親子の会話パリー祭

朝貌あさがおや咲た許よかりの命哉

夏目漱石

一里行けば一里吹くなり稲の風

枕辺あしだや星別れんとする晨あした

湧くからに流るゝからに春の水

瑠璃色の空を控へて岡の梅

秋の川真白な石を拾ひけり

## かさね吟行会

### 「大磯・鳴立庵」 六月

田中清秀

西行法師は本名を佐藤義清、命を深く見つめ花や月をこよなく愛した平安末期の歌人で眉目秀麗、詩歌管弦に優れていたと言われている。その西行法師がこのあたりを吟遊して「こころなき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕暮」という名歌を残したと言われる。その後、元禄年間俳諧師として有名であった大淀三千風が第一世庵主となり鳴立庵を興し、現在の第二十四世庵主に引き継がれている。今回のかさね吟行会はこの歴史有る大磯の鳴立庵を句会場として行おうと言う趣向である。

平成二十八年六月十日、梅雨の晴れ間の希有な一日大磯駅に集合した。古き駅舎ののんびりとした空気に迎えられる、早速に海岸方向に向けて俳句散策へと出発する。海辺の町は清々しい潮風が気持ち良い。

湘南の街並み白く夏燕  
自転する地球にまろし夏みかん

素山  
由利

先ず大運寺を目指す、道が分かり辛くその上本尊は

見られず、早々に近くの島崎藤村夫婦の墓のある地福寺へと向かう。境内は綺麗に掃き清められ、大きな梅の木の下に夫妻仲良く並んだ墓石があり紫陽花の切り花が供えられていた。

紫陽花を対に供えし藤村墓  
別荘の面影の町濃紫陽花

皓一  
陽子

続いて延台寺という曾我兄弟ゆかりの寺に向かう。日本三大仇討ちの一つ曾我物語の兄十郎と結ばれた一代の舞の名手虎御前が開いたと言われ、仇討ちで果てた曾我兄弟の菩提を一生涯弔った。ここには仇討ち相手の放った矢と刀の跡が生々しく残る十郎の身代わりの「虎御石」も納められている。また、宿場の遊女の無縁仏も境内の片隅に静かに眠っている。

看板猫に迎えられたる梅雨の寺  
青葉閣文字の薄れし無縁塚

さち子  
清秀

その後は大磯海岸に向かって進む。お目当ては丹沢山系から海の水を求めて飛び来るアオバトを観察することにある。場所は照ヶ崎海岸で神奈川県天然記念物に指定されている。毎年六月から八月かけて群れをなして岩

場を飛び回り、窪みに溜まった海水をくちばしで吸い込むように飲む。餌の木の実は不足しがちなナトリウムとカリウムを補う為ではないかと言われている。しかし残念ながら昼時は飛来が少なく眼前には数羽の姿が見受けられるのみであった。少しでも見られたことを良として、ここでのんびり海を見ながらの昼食となった。因みに早朝と夕方には「ワーアオー、アオウアオー」と鳴きながら飛び来る姿が多く見られると言う。

磯の香や青鳩の飛ぶ海を見て

青鳩を見つつ海辺の昼餉かな

京子

善恵

周辺は磯浜が目の前に広がり、振り返ると西湘バイパスの向こうにエリザベスサンダースホームの松林の緑、西方に大磯町役場のこんもりとした丘陵が横たわりアオバトの展望によく似合った景色となっている。

いよいよお目当の鴨立庵に向けて歩を進める。旧東海道に沿いの石段を降り石橋を渡ると鬱蒼とした緑に囲まれ別世界に入ったような気分となる。棟続きの庵室と俳諧道場には畳が敷かれ、床の間には紫陽花が生けられていた。日本三大俳諧道場の一つと言われ、会場には涼しい初夏の風が吹き抜ける。足の疲れを癒やしなごら、みな俳句作成に余念がない。

開け放つ鴨立庵の涼しさよ

正規

帰りには鳥崎藤村が晩年を過ごした私邸を訪ねた。敷地百四十五坪に二十四坪の邸宅、決して広くはないが長年連れ添った静子夫人が「大磯の住居は五十年に及ぶ主人の書斎人としての生活の中で最も気に入られたもの」と述べている。ここで藤村は「涼しい風だね」との言葉最後に、昭和十八年八月二十一日に七十一歳で亡くなっている。

文化の香りの残る、気候温暖、風光明媚な大磯の地での吟行会は最後にしばしの時を駅前のお茶店で冷たい飲み物で喉を潤し自作の反省などしながら、無事にお開きとなった。

■かさね吟行会

日時 八月十二日(金) 十一時集合

場所 赤坂迎賓館

集合 JR四谷駅赤坂口改札

申込 森岡陽子宛 (03)3712・2835

『酔いの徒然』（五二） 丸山酔宵子

『ヘミングウェイの〈モヒート〉』

地球温暖化の影響か、もう5月ともなるとからつと澄み切った空に眩しく強い日差しが降りかかり、いよいよ生ビールが美味しくなる季節の到来であるが、銀座通りの照り返しが強い昼下がりには、ちよつと洒落たバーでラム酒が欲しくなってくる。ラム酒を飲むと頭が心地よいハイ状態になるが、下半身はどう言う訳か冷静で落ち着いていて、流石カリブの陽気な酒なのである。

ラム酒は、西インド諸島が原産で、サトウキビの廃糖蜜または絞り汁を原料として作られる蒸留酒。サトウキビに含まれるシヨ糖を酵母でアルコール発酵させてエタノールに変えた後、蒸留、熟成することで作られる。糖蜜から造るラムを「インダストリアルラム」サトウキビ

を絞ったジュースをそのまま発酵醸造するタイプを「アグリコールラム」と呼んで区別している。

ラム酒と言えば文豪アーネスト・ヘミングウェイを思いますが、好きだった「フローズンダイキリ」はクラッシュアイスにラム酒はダブル。そして糖尿気を気にしていたのか砂糖は抜きで、グレープフルーツジュース。「ダイキリ」はキューバの鉱山「ダイキリ」で働いていたアメリカ人技師が、灼熱の土地柄から清涼感を求めキューバ特産品のラムに、ライム・砂糖・氷を入れて作って飲んだのが始まり。

ハリウッドヒット映画「バイレーツ・オブ・カリビアン」シリーズのジョニー・デップ演じるジャック・スパーロウ船長は、カリブの海賊が好きなラム酒が好物。この映画の大ブームのおかげで、イギリスではラム酒が飛ぶように売れ、ダイキリ、モヒート、マイタイ、ピニャコラーダ、ラムコークといったラムベースのカクテルが飲まれ、ラムの消費量は前年比倍増とのこと。

呑兵衛へミンゲウエイは、ヴェネチアの『ハリーズバー』が大変お気に入り、海を眺めテラスでダイキリやマティーニを飲みながら原稿を書いていたであろう。2回ほどヴェネチアの『ハリーズバー』に行ったことがあるが、一階入り口横のカウンターバーにはウエイティングのドレスアップした紳士淑女で一杯。皆、名物のカクテル「ベリーニ」を飲んでテーブルの空くのを待っている。

『ベリーニ』はビーチジュースにイタリアのस्पマンテを使ったカクテル。(あくまでイタリア産の発泡ワインに拘っていて、シャンパンやスペインのカヴァではないのである。)

ヴェネチアの『ハリーズバー』は、その評判からニューヨークにも進出したようだが、ヘミグウェイも勿論出沒し、いろいろなオジナルカクテルを注文したことであろう。大好きなラムのカクテル「モヒート」ではミントを大量に入れ、葉っぱだけとはいわずに、茎までも投入す

るのがヘミンゲ流。

俄かに空が掻き曇り、早や今年一番の夕立ち。それは、雨宿りで、モヒートと行きますか……。

夕立を避けてパールのミントの香

酔宵子

## 本からのあれこれ(9) 米田文彦

### 「鮎」

岐阜県本巣郡は柿の名産地であり、その北方町は岐阜市から西へ車で約二十分、歴史のある穏やかな町である。

その町にある自分の家に下宿しないかと私を誘ってくれたのは、岐阜に勤務してから知り合いになった夫婦だった。独身だった私は賄い付きという条件に気持ちが悪く、六畳一間の部屋に住み始めた。夫婦の年齢は私よりだいたい十歳上、いま考えれば兄弟みたいなものだ。

主人の趣味は釣りであり、夏近くなって鮎釣り解禁ともなると、毎朝四時前には家を出て川に向かう。

何度か一緒に連れて行って貰ったが、道具も鑑札もない私は見物したり寝転がったり、少し川で遊んだりしていた。

川は根尾川で、揖斐川に合流して木曾川、長良川とと

ともに末は海へ流れ込んでいく。

早朝の川の中には何人もの釣人が、胸まであるゴム長を履いて入っている。ある人は餌を付けて、ある人は鮎の友釣で、またある人は網を投げて数を取りたいという様子で、さまざまなものだった。

主人も投網をよくやり、数十尾の鮎を持って帰ってきた。そのような時の食卓は大いに賑わい、塩焼から鮎飯までいろいろなお馳走となった。

定評のあるところだが、鮎は、更に言えば鮎の動きはとても美しい。なめらかな銀色の細身、艶のある黄色味の腹、いかにも苔をついばむのに都合の良さそうな口と小さいけれど鋭い歯、動き廻る尾鰭。

友釣で釣り上げられた鮎とおとりの鮎と、二匹が跳ね回りながら川の水と光を跳ね上げる様子は、周りの山の緑と相まってまさに瞬間の美である。

そして本当に良い香り。「香魚」とはよく言ったものだ。塩焼を箸で押さえつけて魚肉をはがれやすくし、骨をすりりと抜いてしまうのが本当の食べ方、と言われたものだ。

枕草子の清少納言は、春はあけぼのから始めて、鳥は・・、虫は・・、川は・・、風は・・、すさまじきもの、にくきもの、心ときめきするもの、など鋭い感性の感じ取るままに、美しいもの、心の動き、ある瞬間、そして宮中の生活などを書いてくれているのだが、魚についてはなにも書いていない。

もし書いていたら、それは、魚は鮎から始まっているに違いない、と私は思うのだ。

川より跳ね上がりたる様はさらなり、なのだ。

ついでに言えば、食事について書いてくれたいたらさぞ面白い内容だっただろうな、とも思う。清少納言の好きな食べ物、嫌いな物、当時の社会研究価値としては勿論だが、彼女の個性についての研究も更に深まったに違いない。

さて、下宿は私の他にも岐阜高等専門学校の生徒を二三人下宿させていた。狭い家なのに一体どこに住んでいたのか。その生徒が下宿している部屋から食事する台

所兼食堂に行くためには私の部屋を通って行く。つまり私の部屋の中を通って、出てからも片足を濡縁に掛けて次の部屋に飛び込んでいかないと行けないという家だった。そういうことも結構楽しく、私もその生徒たちと楽しく付き合ひさせて貰っていた。

鮎に戻る。鮎といえば鵜飼だろう。月のない夜、岐阜城はライトアップされて浮かび上がる。

長良川にはホウホウという掛け声で囃されつつ潜る鵜を装束の鵜匠が操って川を下ってくる。よく見ると鵜は盛んに鮎を飲み込んで鵜匠の魚籠に出している。夏真っ盛りである。

岐阜のある人は「鵜飼は橋の上から缶ビール片手に見るのが一番だ、良く見えるでな。なにしろタダだ。」と私に言ったものだ。

私は夏が近づくくと、鮎と郡上踊りの岐阜を想い出す。

## ある自然科学者の手記 (51) 大橋望彦

### 『生・若・老・死』

#### 17) 「復学」

中学校三年生に復学した。前のクラスメートは四年生になつていた。教師はどうせ皆も勉強はしていなかったのだから大橋君も四年に戻つてきてもいいんだよ。と言つて下さつたそうであるが、父はもう兵役も無くなったのだし、時間をゆつくり掛けて勉強したらいい、と留年を薦めてくれた。結果的には、二年に亘つてのクラスメートが出来て友人を二倍に増やすことが出来たのである。

#### 18) 「新制高校時代」(S 23・4:1~S 25・3:31)

昭和23年の教育制度の変遷に伴い、6:3:3制が制定された。小学校が6年、中学校が3年、高等学校が3年という新制度である。それにより小生は旧制の五年生になるどころ、新制の高等学校二年生に編入された。獨逸学協会中学校が無くなり、「独協中学校」と「独協高等学校」となり略して「独協中」「独協高校」と言われている。

#### 19) 「独協高校に自然科学部生物班を創設した」

丸山政次君と小生で生物班を創り、中学の下級生も含めて課外活動を始めた。最初は器具や部室も無く、細々と捕虫網、三角紙入れや植物採集用の胴乱を持ち合つたり、

木製の三角紙入れを自製したりして活動し出した。班員は七八人はいたように思う。その内の二人で、河野寿夫君が奥多摩の拙宅を訪ねてくれて、一泊してくれたが、その際に初期に発行したガリ版刷りの機関紙を持参して見せてくれた。大変懐かしかった。その後予算が付き、部室も立派な実験室を作つて貰えた。大きな化学実験機が二台に、細長い六畳位の二重扉付の暗室、更に薬品棚や試薬瓶に各種試薬類、バーナー類、試験管、ピーカー・フラスコ類、双眼顕微鏡、実体顕微鏡、解剖器具類、プランクトン・ネットと必要なものは何でも揃つていたといつても過言ではなかった。よくも高校生の我々に設計から備品購入までを全て任せて呉れたものと、今でも些か不思議に思う。生物班の班長先生は伊集院という元公家様の年配の先生であつたが、我々を大変信頼して下さつていたのであろう。

#### 20) 「フィールド活動」

一番豊富に生物の種類を揃えることの出来るのは、何といつてもプランクトン・ネットを曳く事であろう。其処で我々は、市ヶ谷の外堀にあるポート屋さんのポートを借りて、プランクトン・ネットを曳いた。岸にいた人達は、何事が始まつたのかと、興味深そうにこっちを見ていた。収穫は十分あった。昆虫採集にも良く出かけた。中央線で、浅川駅(現高尾駅)まで行き、其処から徒歩で裏高尾山に登つた。其処は蝶々の宝庫であつたのだ。またもつと近くでは、井之頭公



園があった。今も有るか否かはハッキリしないが、公園の端のほうに平山博物館と言う二階建ての西洋館があった。其処には付近で採集できる沢山の昆虫標本が陳列されていたし、平山先生のコレクションで素晴らしい蝶類の標本が二階の標本棚にギッシリと収納されていた。それに、平山先生が出版された「日本蝶類図鑑」は我々の大事なアンチヨコ（隠し持った字引）であった。採集旅行は、色々行つた。伊豆半島や、日光にも行つた。テントを借りてキャンプも行つた。

## 21) 「学園祭」

独協祭といつて、部活動のご披露する機会があった。生物班も色々企画したが、その一つとして、哺乳動物の解剖をしようと言う事になった。丸さんと一緒に、先ず目白警察署に行き、野犬狩りの時捕まった子犬を戴けないかと頼んだが、署には現在そのような犬は居ないと断られた。しかし、若しその気があるならば、専門にそのような犬を処分している所があるので紹介してあげても好いと言うことであつた。早速警察の紹介状を手にして、江東区の荒川端にある皮革製作所に行つたのである。解剖に使うという理由を述べて子犬を欲しい旨を伝えたが、最初は、そんなのは無い。と取り合つてくれなかつたが、警察の紹介状を出して再度お願いすると、最初からそれを見せればいいのにと、しぶしぶ乍ら小さな生後一ヶ月程度の子犬を二匹持つてきてくれた。謝礼は要らないと言うことで、有り難く頂戴して帰つ

てきた。さて、解剖材料は手に入れたものの、どの様に処理すればよいか、全く判らなかつた。皆が尻込みして手を出さないので、止むを得ず小生が勇を鼓して執刀することとなつた。先ずクロロホルムで麻醉し、頸動脈から放血してサクリファイ（犠牲）した。板に手足を括り、開腹した。後は生物の教科書にある解剖図に首つただけで、各臓器の取り出しをたどたどしい手つきでも懸命になつて進めた。ものすごく時間が掛かつたと思うが、各臓器に名札をつけて、保存瓶に入れホルマリン漬けにした。消化器は長いので、食道、胃、小腸、大腸などの部分に分けて、各々縦割りにして内部が見えるようにした。肝臓は大きいので一部にした。肺はホルマリンに浮いても浮いても浮いてしまひ困つた。一端バキューム瓶で脱気してからホルマリン漬けにすることを先生から教わり解決した。兎も角大変な仕事であつた。名前が付いた保存瓶がたくさん出来て、解剖図を大きく書いて、テープでそれら瓶とを結んでデモンストレーションが完成した。生物班のこのプレゼンテーションは大成功であつた。ただ、どうしても後一匹を処理できず、小生が家に持ち帰つた次第であつた。この犬は、黒くて、足先だけが白く、足袋を履いていくようなので「タビ」と名付けられ、大きくなつて子供を数匹生み、何年も我が家の愛犬として家族の一員みたいになつていた。

## 絹の話 (69)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

先日(6/8~14)豊橋「ほの国百貨店」で恒例となつたワイルドシルク展を三河の木綿グッズの方々と共催で開催しました。地元の「帆前掛け」がアメリカで売れている、豊橋からカンボジアに送ったガラボー機の糸で手織された木綿のシヨールが販売されるとあつて、朝日、毎日はじめ新聞5紙が写真入りで掲載、NHKテレビも中部6県の朝の番組で放映されるなどして売場は大フィーバーでした。そこにご来店頂いた「三河アララギ」の絹の話の愛読者から、内容がややむずかしい、もう少し肩のこらない物にならないか!と云う忠告を頂きました。そういえば最初の頃は講談の様な話が多かつた様に思えます。シルクの機能性の話の頃から理屈ボクなつて来たのでしょうか。少しやわらかい話にしてみましよう。

### ほーほー虫来い

### 【苦い水 甘い水】

小川の水に苦い甘いがあるのでしょうか。

人の味覚には感じませんが、どうもあるようです。そ

れでは苦い水とはどんな水なのでしょうか?

それは杉や檜の様な針葉樹のもとから流れて来る水のようにです。針葉樹の多い山から流れて来る河川にはウナギもドジョウもフナも多くは住めません。

明治以来、国の森林政策はクヌギやブナの様な広葉落葉樹を伐採し、建築材としてお金になる杉などの植林を推進して来ました。結果、日本中苦い水の河川ばかり多くなり、カワナ(川蝿)も住めなくなり、何処でも見られた虫も希有なものとなつてしまいました。この水が苦い水の正体です。

一方、紅葉の美しい山野から流れる水には多種多様な水生生物が生息し、これらの落ち葉は腐葉土として周辺の土壌も豊かにしてくれています。これらに含まれるフルボ酸を含んだ水が川に流れ海に注がれ豊穡な環境が維持されるのです。ホタルは甘い水が好きなのです。

日本列島は氷河期が終わり、温暖化して来るとドンダリのなる広葉樹林に覆われて来るのです。そして川も海も土壌も豊になり、石器時代、縄文式時代の人々の食生活は意外にグルメなものであつたと思われまます。

江戸前の魚は美味しいと言われたのは奥多摩の雑木の間を流れて来た水に由来していたのですが、現在は広く杉や檜に改林されたせいで、東京湾の浅瀬には本来いて

よいはずの色々な生き物が不気味なほどいないのです。5月の潮干狩りの楽しみは渚を歩いて小魚と戯れる事でもあるのですが。

日本中からホタルが激減したのも、そこらじゅうが苦い水になってしまったからでしょう。

## 【天蚕の育て里】

木の葉のグリーン色をした天蚕繭は日本古来種です。白い繭の家蚕が中国から入る以前（弥生時代後期）、人々は麻や獣皮に加え、この繭の蛹を食べた残りを紬糸にして衣類を作り着ていたと思われまます。

保温、保湿、抗菌、緩衝性などに優れた神宿る着衣であったでしょう。その為、奥三河では律令時代になっても暫く、この繭から採れる不思議な艶のある薄緑の糸を宮中に納め、伊勢神宮にも「アカの糸」として奉納していました。（後に家蚕に代わり、現在に至る）

この野蚕はクヌギ、ブナ、ナラなどのドングリのなる木の葉を食べて育ちます。古代日本列島がこの様な広葉樹におわれていましたので、人々はこの繭をたやすく集める事が出来たのでしよう。

天蚕の育つ森、蚕の舞う里は同じ環境なのです。この木々の葉を通る空気を吸うと、気持ちか穏やかになって

来ます。若葉の森林浴に行つて「いらいら」する人はいでしょう。まさに日本は甘い水列島でした。

## 【山林荒れ、人心荒廃す】

昨今の日本の山林は材木価格の低迷で、山の木の管理が手薄になったり、放置林も増えて来て憂慮される状態です。高度成長以前の手を入れた赤松林の山では（赤松その物はお金になる木材ではありませんが）松茸がよく採れて潤いました。それ等山の持ち主もサラリーマンとなり、山のご（松の落ち葉）かきもままならなくなつて、冬の山肌へ採光がなくなり、松茸が生えなくなつてしまいました。

蚕が各地から姿を消したのと似ていませんか……。ホタルの乱舞は一年ほんの一時ですが、どんな精神科医やカウセラーノ話を聞くよりも、心を豊かにしてくれるでしょう。

今日の高度グローバル経済社会とは地球環境や人心を傷め、それから収奪する事ではないでしょうか。

蚕や天蚕の育つ環境を少しでも取り戻したいものです。これは地道ではありますが大きな社会貢献と思いません。

### 短歌に詠まれた茂吉

—あるいは茂吉を詠んだ歌人— 五十九回

「月虹」 鮫島 満

### 十七 鹿兒島寿蔵 3

しぼりたての乳を下げきて幾月ぶり茂吉先生の前に  
坐りぬ 『群緑』 昭和二十四年

前号に、同年の作として、茂吉一人分だけの牛肉を土産に持って訪ねるといふ歌をとり上げた。衰えて外出することも少なくなつた茂吉は土産を喜んだのであろう。

春の雨さむく降る日にとことはのあたりに君のみた  
まを送る 『帰りにきて』 昭和二十七年  
うつしよの光ことごとくのむ如くみまかりし人をい  
たみ甲ふ  
前の日は湯あみしたまひし常のごと在り経し人の忽  
ちにして

題詞に「斎藤茂吉先生追悼歌」とある。茂吉の死去は昭和二十八年二月二十五日、死因は心臓喘息であった。記録によるとこの数日前に大雪が降っている。

冬の朝の雨あたたかく降るなかにしづまりてあり白  
き墓石 同  
沈黙をちかひしときに枯山の日向に君はまなこつぶ  
りし  
にほひ果てし堅炭の燠うつくしと言ひつつ火箸鳴ら  
したまひき

「青山墓地」と題する一連中の歌。二首目、三首目は生前のことを追想したもの。二首目は、愛人永井ふさ子とのことを口止めされた日のことである。三首目。茂吉は火鉢で暖をとることが好きで、たいていは燠を灰で隠して手をかざしたが、この歌によると燠火の美しさを称えることがあつたらしい。

つぶつぶの朱の文字ひろひ写しをり君が壮年の日の  
批評言 『とよたま』 昭和三十一年

註に「茂吉添削山沢集」とある。「アララギ」の選者である茂吉に批評を書き入れてもらった草稿をまとめていたのであるうか。その茂吉の字を「つぶつぶの朱の文字」と言っているのは、見ようによつてはわからないでもない。

明日の茂吉の忌日きよめむとあはあは雪の降りつぐ  
ゆふべ 同

朱の柱太々と立つ堂内を雪後の風の吹きとほりゆく

茂吉翁の地下足袋はけるさながらに人立てる見ゆ太

鼓店の前

茂吉忌を修して出でし庭の面 雪解の水の流れ終り

ぬ

一連の題は「茂吉先生三回忌」。一首目は二月下旬の茂吉三回忌の前日に降る雪を、「明日の茂吉の忌日きよめむ」雪ととらえたところに思いの深さが感じられる。二首目は三回忌の行われる寺の堂内に雪を擦る風の吹くさまを詠む。三首目は寺の近くの太鼓店の前に地下足袋姿の男が立っているのを見て、晩年には好んで地下足袋を履くことの多かった茂吉を偲んでいるのである。

強羅生活いまに遺せる道具には必然単純の茂吉の字

あり

『故郷の灯』昭和三十八年

「箱根童馬山荘」と註がある。一般には「強羅山荘」と呼ばれる山荘を茂吉の死後に訪ねた時の作。茂吉はここに長期間滞在することもあり、手伝う人がいない場合は自ら食料を仕入れて煮炊きすることもあった。それらの道具に茂吉の字で名前や用途などが書かれていたので

あろう。

みづからの鼻さき舐めむばかりなる舌出人形の茂吉

作らむか

青髻の板垣君と日本海を飲み煽りたり茂吉を言ひて

茂吉は考えごとをしたり親しい人と話す時、赤い舌を

べろりと出したことで知られる。「舌出人形の茂吉作ら

むか」は、作者が人間国宝になる紙塑人形作家であるこ

とに基づく表現である。二首目の「板垣君」は山形県大

石田時代の茂吉の身辺の世話をした板垣家子夫のことであ

る。作者が大石田の茂吉と共に茂吉の足跡を訪ね歩い

た時の歌であらう。結句は茂吉の思い出を語ったという

ことである。

三本檜の山より流れくる清水茂吉飲みしといへば掬

びぬ

高原の秋草摘みて七十人茂吉の墓にささげむとゆく

『青墨』昭和四十二年

茂吉ゆかりの蔵王高原を訪ねた時の作。山から流れくる清水について茂吉も飲んだと聞いて自分も飲んだというのである。二首目は、七十人が茂吉の墓に詣でたというのだから、斎藤茂吉記念館での集会か何かの折のことかと思われる。

## 楽しい時間 45

山本紀久雄

2016年6月30日

## 「イスラエル旅行・・・その二」

## イスラエルではビックリすることが多い

イスラエルは他の国と異なることが多い。ユダヤ教という宗教からくるもの、周りをイスラム国家に囲まれていることからの軍事的なこと等、たくさんあるが、そのひとつが「食物規制・コーシエル」で、豚、ラクダ、ウサギ、駝鳥、うろこのない魚はダメで、さらに、乳製品と肉類は一緒に食べないということ。

もう一つは「安息日・シャバット」で労働を休むこと。それは毎週、金曜日の夕方からはじまり、土曜日の日没で終わるが、この安息日に火を使ったり、木を切ったり、金銭使用は禁止である。タクシーも、バスも、公共機関も商店も、全てストップである。

理由は、神が天地を創造して7日目に当たる土曜日に働くことは、神の創造した世界に干渉することになるためであり、この日は、乗り物の運転はダメ、電話をかけることもダメ、電灯をつけることもダメ、一切の活動を止めることになる。

例えば、家のブレーカーが落ちて電気が使えなくなった場

合、近所の外国人のところに行き「ちょっと」という。それは家に来てブレーカーのスイッチを入れてくれ、という意味。しかし、その際「ブレーカーを上げてくれ」とは言えない。それは命令になり、労働に相当するから。

今回、エルサレムのホテルに金曜日宿泊した。部屋は11階。バックを部屋に運ぼうとエレベーターの前に立つと、二台のうち一台は運転中止。当然ながら部屋まで到達するにはとてつもない時間を要する。

部屋でバックの整理もつかないまま、夕食の時間が迫って来た。慌てて夕食会場の3階レストランに行こうと、エレベーターを待つが、これが全然来ない。

理由は、この安息日には近所のユダヤ人が低層階に宿泊し、ホテルは満室。従ってレストランも満席。エレベーターの利用は、低層階に宿泊したユダヤ人が使用するので、上層階には来ない。従って、観光客の我々は11階から歩いて3階まで行くことになる。

## イスラエルはワインが美味い

イスラエルでの夕食では赤ワインを飲んだ。ユダヤ人にとってワインは必需品。ユダヤ教の聖典にはワインに関する記述が多い。

「イスラエル産ワイン」は欧米のユダヤ人を中心に需要が増加。近年では品質の高さが評価され、ユダヤ人以外にも浸透してきている。



イスラエル・ワインの産地として知られるゴラン高原は4カ国と国境を接する。シリア側からは時折、銃声や爆発音が聞こえ、イスラエル軍が警戒態勢を敷くところ。

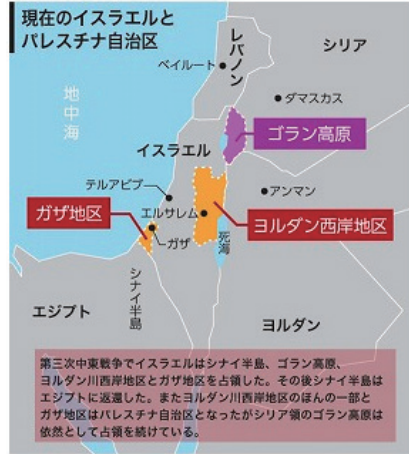
ゴラン高原は、

シリア領だったが、1967年の第3次中東戦争でイスラエルが占領、49年間、実効支配を続けている。占領したときは、何も作られていない荒地地だった。

だが、標高約1200メートルで昼夜の寒暖差が大きく、原料のブドウ栽培に適しているとイスラエルは判断し、ワイン作りに入った。

人口約800万人のイスラエルで、ワインリーの数はゴラン高原を中心に200を超え、ワインの輸出額は14年に前年比8%増、統計が発表済みの15年1〜6月も増加基調で、今ではゴラン高原が「イスラエル産ワイン」の代名詞ともいわれる。

そのゴラン高原の赤ワインのうまさには、ビックリした。飲んで



だのはエルサレムのスーパーで買ったGAMLAワイン。日本円で2300円。

世界各地で赤ワインを体験したが、ワインづくりの正確性と「う点で、」GAMLAは「The Wine」の「感」欠点がないのが欠点というくらい。試験ですべての科目で100点取った秀才が人間として面白味に欠けると同じようだ。

しかし、考えてみれば、イスラエルはワイン発祥地と言われる地域なのだから当たり前なのかもしれない。発祥地としては諸説あるが、左図のようにギリシヤ、ジョージア(旧グルジア)、イスラエルで、伝統的に受け継いできたのかとも思う。

このGAMLA赤ワイン、あまりにも美味しいので、通販サイトで調べたが白はあるが赤がない。三越伊勢丹のワイン売り場に行つても、イスラエル・ワインはあるが、GAMLA赤ワインは置いてない。もう手遅れだが、もっと多く買つてくれればよかったと悔やんでいるくらいだ。

残念なので、思い出にと、空瓶の写真撮っていたら、たちまちミッコが飛んで来て、カメラの前から離れない。そこで、今月も可愛いミッコ紹介する。



## 楽しくマナー (14)

辻 照子

### 「ワインのオーダー」

レストランでワインのオーダーをする時、堅苦しく考えずに、基本はご自身の好みを優先することが大事です。ワインの本数、価格、好みを言って、料理に合うワインをソムリエに選んでもらっても良いですが、下調べをして知っておくだけで、オーダーがスムーズにできます。

ワインを何本にするか迷ったら「人数÷2＝頼む本数」を基準にします。オードブル、魚・肉料理、チーズ、デザート等、コース料理に合わせて、その都度のワインをオーダーしたり、全てに合いそうなワインを選んだり、気軽にグラスワインでいろいろな種類毎に楽しんだり、予算に合わせてオーダーすると良いでしょう。

ワインの価格が気になりますが、接待ならば一般にコース料理一名分の価格のワインを選ぶと間違いないです。最初にスパークリング、辛口白、ロゼ、軽い赤、重い赤、甘口白の順で色の薄いから濃いワインへ、軽いから重いワインへオーダーしてゆきます。同行した人の前

でどんなワインを選ぶか迷ったら、好きな葡萄の品種や産地などを云い、提示されたワインリストの価格を指しオーダーするとスマートです。ソムリエに「お任せします」とか、「何でも」、「お薦めのワインを」と言ってしまうと、お支

払いの時予算オーバーでびっくりするかもしれません。

通常、ワインを選んでオーダーするのは招いた側の男性で、女性は楽しく会話を進めて場を和ませるよう、楽しく過ごして戴けるよう、気をくばりましょう。数組のカップルが席に着くとき、夫婦であっても離れ離れになります。立場（地位）にあわせて夫婦は対角線上に離れた席に、夫の隣は同じ位の立場（地位）の方の奥様、離れてその奥様のご主人の隣の席に妻は着きます。それは夫妻がお互いに助け合える近さではなく、私にとっては初めの頃は心細いものでした。

「黙っていてはダメ、話をしなさい」。「日本人は笑ってばかりで話をしない、文法を気にせず単語をつなぐだけでも良いから話しなさい」といつも云ってる夫は、





仕事の時はミスが有つてはいけないので英語で話してましたが、プライベートでは慣れないフランス語でコミニケーションをとってました。私も覚えたてのフランス語で、日本の文化や歴史、気候、子育て、教育などについて、文法や女性・男性名詞の冠詞 (la/le une/un) など、ごちゃごちゃになっていても、私の言いたいことを、相手が正しい文章で言い換えしてくださったりして、理解し合え、会話が続きました。そうした経験を重ねてゆき、正しい文章を使い話す、自分の言葉となり、嬉しくなりました。

試飲するワインはサンライズ／カベルネソービイニヨン（赤）とシャルドネ（白）、国産甲州遅摘み甘口（白）3種類

### \*チーズチキンのオープン焼き

材料（4人分）

鶏むね肉2枚 酒・醤油・ケチャップ各大2 ナチュラルチーズ4枚 玉ねぎ・パプリカ½個

作り方

①鶏肉は切れ目を入れ平に伸ばし、2つに切り、酒、醤油に漬け込みクッキングシートに並べ、ケチャップを

塗りチーズをのせ細切りにした玉ねぎとパプリカをのせ200℃のオープンで12分位焼く。

### \*洋風おにぎり

材料（4人分）

ご飯茶碗4杯位 枝豆（冷凍でも）80g ツナ缶1缶  
チーズ80g 塩少々 バジル小2

作り方

①枝豆は茹でサヤから出し、ツナは油を切り、チーズは小さいサイコロ状にカットにする。

②温かいご飯に①とバジルと塩を加え混ぜ、おにぎりを作る。

### \*バナナプディング

材料（4〜6人分）

食パン（6枚切）2枚 バナナ1本 A（卵1個 牛乳1C 砂糖大3）

作り方

①パンは角切りにし、混ぜたAに浸し、バナナは1cm幅に切る。

②耐熱容器に①を入れ電子レンジで6分加熱する。

## 「歴代天皇御製歌」(六十)

貴名海屋資料館

「長慶天皇」第九十八代・在位二二六八年(二十六歳)・一三八三年(四十二歳)

長慶天皇は、後村上天皇の第一皇子。御代は、官軍と賊軍(足利側)の交戦が絶えず、暗たんたる心境であられた。在位中、皇居らしい所もなく、吉野、金剛寺、大和の栄山寺へと行宮を移されたが、歌学を究められ、源氏物語の解釈を加えられた「仙源抄」がある。

春 出づる日の影も神代にかはらねばわが国よりや春はたつらむ  
夏 あつめては国の光になりやせむ我が窓てらすよはのほたるは  
秋 風はやみしぐるゝ雲もたえぐにみだれてわたる雁の一つら  
冬 うつろはぬ人の心のためしとやこの山路まで残る白菊  
雑 しづかなる心はなほぞなかりける世を思ふ身の山のすまひに  
都月 月はなほ同じ雲ゐをめぐりけり身にはへだつる都なれども  
千首の歌をめざされて

をさまらぬ世の人言のしげければ櫻かざしてくらす日もなし

## 「歴代天皇御製歌」(六十一)

貫名海屋資料館

「後龜山天皇」第九十九代・在位一三八三年(三十七歳)・一三九二年(四十六歳)

後龜山天皇は、後村上天皇の第二皇子。正統の皇位継承者が所持される「三種の神器」を北朝・第六代の後小松天皇に渡され、讓位。歴史上、南朝、北朝の合体となる。

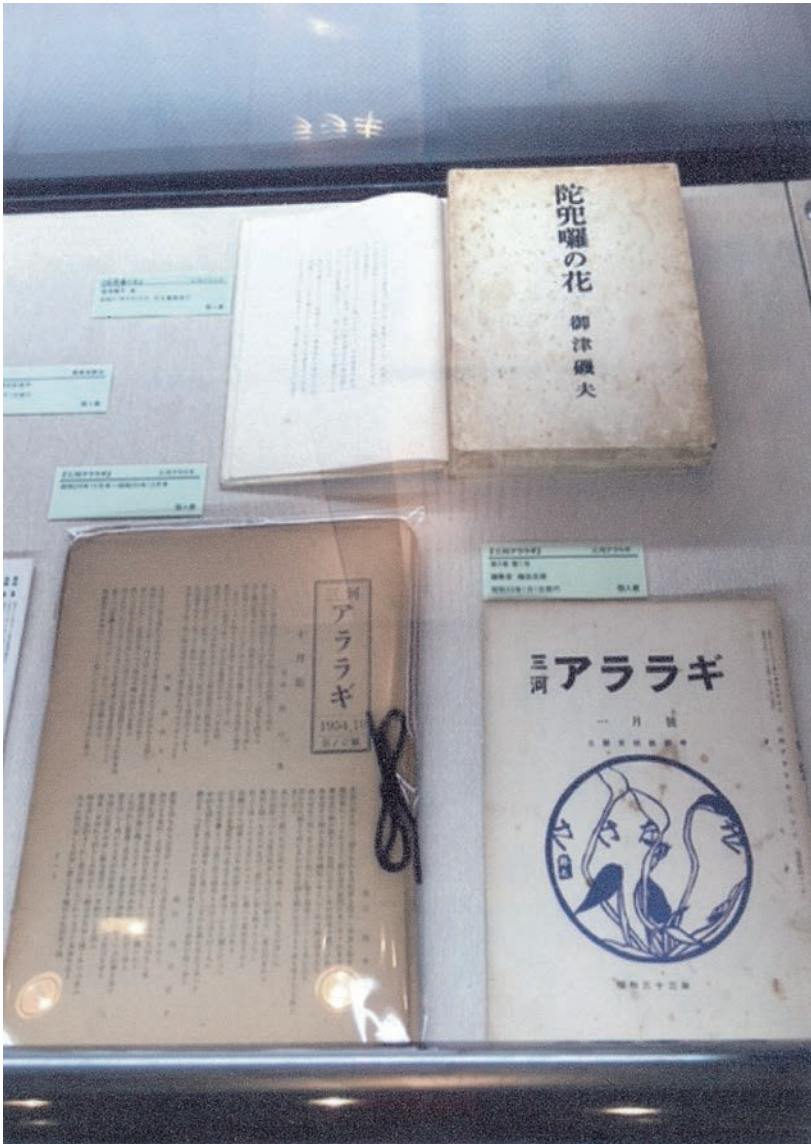
春宮(皇太子)

なりはひにたのむ所や多からん日をへてつきずとる早苗かな

おもひやれおなじ空にやながむらんなみだせきあへぬ秋のゆふ暮

おもひや  
思遣る人だにあれな住慣れぬ嵯峨野の秋の露は如何にと

「文化のみち二葉館」展示



岡本八千代







## 「氷魚」のことから (187) 岡本八千代

久しぶりに陽が照って、私の六畳間にその光が明るい。何となく嬉しい気持ちで鉛筆を持つ。――。

漱石もついに俳句を作るようになって、子規との交流が深くなつた。子規たちの運座(句会)は、万年床の上に胡坐をかいた子規をとりかこんでおこなわれ、師匠格の子規がめいめいの句の上に○をつけた。子規は、足を投げ出したり、頬杖をついたりして無作法なかついで句作にふけている松山の仲間とは「お前」とか「アシ」(私)とかいう松山弁で呼びあつたが、漱石とだけは「君・僕」で話したと、いわれている。

しかし、選句になると、子規は漱石の句にも容赦なく批評を加えたのであつた。漱石は、子規を「病苦を忘れたように熱心に、いかにも親分然とした態度で一座を主宰している人と感じていた、となかば感動したように眺めていたらしい。

子規は、「昼になると蒲焼を取り寄せて、ぴちやぴちやと音をさせて食う。また他のご馳走も取り寄せて食つたようである」と。また、子規は東京へ帰る時分に、漱石に「君払つてくれたまえ」、その上まだ「金を貸せという」「何でも十円かそこら持つて行つたと覚えている」などなど漱石は述懐している。――。

そんなこんな話、ほんとうだろうか?と私は疑う。――いやしかし、二人の仲はそれほど信じ合つていたのか?とも思う。以前から私は、不思議な交友と思つていたが、一つは男同志の友情

なのか?それとも一つの家族としての間柄なのか?子規の甘えがそうさせるのか?漱石の子規に対する情け心か?とも思つたりする。

漱石と子規、二人の友情、そこにある心情の深さを彼らの手紙のやりとりの中から探さしたいと思う私。

「松風会」の運座連中に加わつて以来、漱石はいつの間にか句作が面白くなりはじめた。子規の主宰の「海南新聞」の俳句欄に載つた二部をここに書く。

- ・白露や芙蓉したたる音すなり
- ・爺と婆淋しき秋の彼岸かな
- ・馬に二人霧を出でたり鈴の音
- ・便船や夜を行く雁のあとや先

その他、子規の添削に従つた9月の作

- ・肌寒や羅漢思ひくゝに座す
- ・土佐で見れば猶近からん秋の山

この頃の漱石は、俳句の発表では、愚陀仏というペンネームを使つていた。

一方、子規の方は当時、芭蕉熱からだんだんと蕪村に熱中して、蕪村の俳句から感じる美しさを思い、写生論に傾むきはじめていた。

しかし、漱石は、子規のそうした俳句よりも、自分自身の内面を表現する作句を欲していたらしい。一名月や故郷遠き影法師――漱石

(江藤淳「漱石とその時代」参考)

# 漢字の遊び男と女

夏目勝弘

梅雨入りが例年より一日早く、六月四日(土)その夜中より小雨が降りだした。日曜日は庭師の仕事を予定していたが、仕事は中止、書斎に入り窓越しに降りだした梅雨空をながめている。手の届く所に大字典があり、調べるでもなくページを繰っている。女へん、にはどのような漢字があるのか、少し興味が出てきた。ならばオトコはどうかと見ると、オトコは田の部に男が字、生の部に甥一字あるのみ。女へんは、二百四十字余りあり、その他にも女の女が入った漢字が多くある。

雨となった今日は二日字引の遊びをすることにした。

オトコと読む字は、男、夫、郎の三字がある。全般的な男の、その字源は、田に出て力仕事をする故、田と力を合せた。部首に男を使っている漢字の、甥の字源は姉妹が他に嫁ぎ生みし男の子、故に生と男を合す。あと二つは、甥(タワブル、ナブル、ミタル、ナヤマス)等の読みがある。そして男(イサマシ)湧(ワク)以上のみ。

女の字源は、膝を屈し手を組み自からを守るかたち。女へんで特に多い漢字は美を現したものの。

好(ミメヨシ) 妙(ワカシ) 姪(美女) 好(女的美称) 姪(美  
好のかたち) 姪(ミメヨシ) 姪(美行) 姪(ナメカシ) 姪(麗シ)  
姪(美女、目の形) 姪(シナヤカ・歩むかたち) 姪(美しきか  
たち) 姪(カオヨシ) 姪(タチャカ) 姪(色美シ) 姪(目美し  
きかたち) 姪(ウツクシ、情に通ず) 姪(タオヤカ、長く弱き  
かたち) 姪(ミヤビヤカ)。

反対語としては姪(ミニクシ) 姪(オオイニニクシ) 姪(コビ

ヘラウ) 姪(ムサボル) 姪(アソビメ) 姪(ワシル) 姪(ネタム)  
老人も男より女性の方が表現する漢字が多い。男は叟(米  
をとく音にも使う叟) 翁。

女性の場合は、姪(タノムシ) 姪(字源は老いたる者は、甘  
言し人を悦ばすより、女と甘を合せた) 姪(ウバ) 婆(字例・  
婆心・親切な心・老婆心) 姪(オウナ) 姪(ババ)。

部首に女へんに属さない漢字に女の文字が使っている漢字も多  
くある。

怒(字源・形声。色に発してイカルこと、故に心をかく。奴  
は音符)。

怒の文字で、いま気になっていることがある。NHKのクローズ  
アップ現代の放送に、多くのサラリーマンが、仕事を終えても家  
に帰りたくないために、居酒屋に寄ったり、街中を歩き回り、  
ウインドウショッピングまた書店にて立読みなどをし、妻が寝た  
ころに帰って行く人達が多くなつたと。

それは顔を合わせれば小言を云う、些細なことで注意し怒る。  
一日仕事で疲れているところに追討ちをかけるように言われるた  
めとか。

家庭内暴力がニュースで流れることもあるが、女性の言葉によ  
る攻撃は暴力にはならないのだろうか。

男性はいろいろな事や、過去の事などを忘れてしまう。反面  
女性は十年も二十年も前の事なども覚えていて、突然にそのこ  
とを話した。また家事全般を二人でし、そして働きに出るこ  
とも、小言とか怒りの原因ではないのかと。

安という漢字の字源は、六の中に居て家を守る者なれば、女な  
く家治まらず。女性の社会進出が言われる時代、要考ともい  
える。



# ことのはスケッチ (45) 今泉 由利

## 「円空僧の和歌」①

「物を増やさない」と決めてこの頃だけけれど、近道として分け入った「古書市」の夥しい書籍の中の三冊、『円空』に立ち止った。

思わず懐き持ち帰った。生涯をかけての憧れが迸る。

ナタ彫の二刀二刀の美しさ。鋭さと、優しさと、温かさと、気高さと・・・寄り添って甘えたくなる。

円空は江戸初期（二六三二年）美濃国に生れた。生涯十二万體造像の願を、諸国を遊行、布教にて神像、仏像を残し、元禄二年（二六九五年）、六十四歳、自ら食を断ち、即身仏入定された。

松前藩の統治はようやく、先住民族とのトラブルの多い、天変地異の北海道に渡り、神や仏の大慈を布教、観音像を彫る。

津軽では、義経寺の観音像を彫り、秋田、愛宕神社・十一面観音。名古屋、尾張、美濃、熱田神宮・白山神社の御神体を。

黒地神明社、天照大神像。美濃加茂の洞窟に馬頭観音。日本仏教のふるさと法隆寺にて、大日如来像。

飛鳥仏、天平仏に親しみ、ここ以後、左右対称の衣紋や飛鳥様式の像を彫る。この時、和歌を詠む。

○万代に目出度き神の在して名を九重のいかるがの寺

法隆寺を下山し、美濃に帰る。長滝寺に十二面観音を。八坂神社の御神体、牛頭天王像を彫る。

奈良県吉野郡、栃尾観音堂へ、聖観音、弁財天女、金剛童子と護法神。本尊聖観音背面に金剛界五仏の梵字と円空の花押を書く。

大峯山は天台、真言の修行場、荒行の最中に阿弥陀如来像。森本坊の観音像。山上の本堂に祀られる。

○大峯や天川に年をへて又くる春に花やみるらん

○昨日今日小篠山に降雪は年の終の神の形かも

○こけむしろ笙の窟にしきのへて長夜のころ法のもしび  
○しづかなる鷺の窟に住みなれて心の内は苔のむしろに

大峯山を下り、志摩半島へ。同地に伝わる「大般若経」を補修する際、表紙の裏に、円空自作の和歌の書いてある紙を貼り込んだ。その和歌の数は千五百首に及ぶ。

その際、五十四枚の大般若経守護の「十六善神図」を描き、貼り加えた。

釈迦如来を中心に安置し、左に文殊、右に普賢、脇に大般若経の伝来に縁深い菩薩たちの法涌、常啼、深沙大将、玄奘三蔵を対に、その周囲を十六善神が護る。

円空の描いた五十四枚の二枚目、二枚目・・・と順次省略された見返絵となり、以後の円空の彫刻となる。

## 編集室だより【二〇一六年六月】

三河アララギ賞 夏目勝弘様

山間の月ヶ瀬めぐり一年の過ぐり過ぎて得しもの形に出で  
こず

長く三河アララギの編集に携わって下さっています。生涯を短歌に向け、自身の足で自身の心で、先達歌人の跡を辿り、膨大な資料の蓄積を糧に、未来を見据えておられます。

○北の丸公園、皇居東御苑、講談ツアー。

講談師・田辺 邑さんの案内と講談と。江戸の時代に戻ったような。御苑は、この世とも思われない完璧さ。江戸のエゴを学ぶ、江戸エゴ行楽重の、なつかしい味わい。「手順を考ええない水で」「無駄なく手際よく」「旬のものを必要なだけ」「使い回し」

○JPTワー学術文化総合ミュージアム「インターメディアテク」旧東京中央郵便局跡地に出来ました。日本郵便株式会社と東京大学総合研究博物館の協働による入館無料です。

東京大学が明治十年の開学以来蓄積してきた学術標本や研究資料などが常設展示になっています。

テイラノサウルスのような大きな化石達、小さな化石達。大動物の骨格達、今と様変わりした植物標本達。学徒になつたようなスペースです。

屋上庭園からは、東京駅近辺の風景が見渡せます。

○大磯嶋立庵吟行会

言い伝えを伝える大蓮寺、延台寺。本当のこの日の木々草々の中にいることが素晴らしい。

照ヶ崎海岸に出て、丹沢からこの海水を飲みにくる。アオバトに会う。不思議がつゆる。

西行のゆかりの嶋立庵で、畏れ多くも、句会をするのでした。

○島崎藤村邸。「若菜集」「破戒」「落梅集」の時、「椰子の実」「千曲川旅情の歌」：偲びました。

○王子権現坂上・鰻の川治。

時代劇のセットの様な引戸を開ける。小さな室内もやつぱり時代劇。ここの鰻が大好き。突然行くと「売り切れ」とよく言われる。

○原宿「太田記念美術館」。今を遡ること二〇〇年、江戸末期から明治にかけて出版された絵手本「北斎漫画」。すべての事項と言ってしまうほどの、モチーフ、描法。

葛飾北斎（二七六〇—一八四九）が弟子達に絵の手ほどきをするための教科書として描いた絵手本。弟子ばかりではなく、一般庶民にも親しまれ、江戸時代のベストセラー。ロングセラー。人物、動植物、風俗、職業、くらしぶり、建築物、生活用品、名所、名勝、天候、自然現象、故事、説話、歴史上の人物、妖怪、幽霊：「北斎漫画」にびつくりたまげて帰ったその夜、私の部屋を、ゴウモリ、がとびまわった。本当のこうもり。何が起ったのか一切わからない。

## 野菜の花 (2)

鈴木孝雄



### ○ 茄子

ナス科ナス属  
インド原産多年草  
奈良時代に渡来  
抗酸化作用をもつ  
皮ごと食すると良い

果菜類にとって花は実の良し悪しを決定づける重要な要素となる。ナスは花の大きさ、色および位置から、実の出来具合を予想できる。写真の「千両二号」の花は、紫が濃くて大きく、花の位置が芽先ではないので申し分ない。

昨年、花の色が薄いので、肥料が足りないのではと思い、何度も追肥したが改善しない。シーズンが終わって株を抜いてみたら、根の周りに土蜂の幼虫が居ること居ること、こんな失敗があった。

過日、孫に「親の意見と茄子の花は千に一つの仇はない」と話したところ、きょんとしていた。どうやら、こんな格言は通じないようだ。無駄花が少ないのは、花の構造にあるようだ。黄色い雌しべが長く、雄しべに近いことが幸いしている。花はやや下を向いているが、積極的に虫を誘わなくてもよいためだろう。

ナスの原産はインド東部と言われている。正倉院の古文書に茄子の記述があることより、中国大陸経由で我が国に伝来し、天平時代にはすでに栽培されていたようだ。江戸時代には人気の野菜で、価格の高騰を狙った促成栽培が幕府で規制されていたという。初夢に「一富士二鷹三茄子」とたとえられるが、茄子は値段が高かったとの説がある位だ。この謂れの起源は沼津との説を、地元の観光協会が喧伝しているが普及していない。起源には諸説あるが、ナスは成すに通じ、縁起のよい野菜であることは間違いないところ。

そろそろ秋ナスの季節、美味しいナスを召し上がって頂きたいと思います。

今回は、オクラの花の予定です。

## お知らせ

△九月号の原稿は、七月三十日(土)までに、必着、郵送ください。

※毎月々の原稿が、期日までに到着しないと、編集に支障をきたします。

郵便の休配(日曜、祝日)を考え、早目に送付して下さい。

※原稿の返却を希望される方は、毎月の原稿に返却希望とお書き下さい。

三河アララギ誌発送に同封します。

▽原稿の送り先

東京都北区王子本町一の二六の六A

〒一四一〇〇二二 今泉由利

※原稿用紙は、二百字詰(20字×10行)を使用し、文字はわかりやすく楷書で濃く大きく書いて下さい。

## 「三河アララギ」について

◇三河アララギ誌・毎月発行。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制・廃止。既納会費は返却致しません。

◇これから講読を希望される方。一ヶ年分、四千円。振替口座〇〇八三〇一六―五六二二九。

◇会員、会員以外の方に執筆をお願いすることがあります。

◇短歌・俳句・論文・随筆など送稿することができます。

◇発行所開催の諸行事にどなたも出席出来ます。

◇三河アララギ発行所・〒一四一〇〇二二

東京都北区王子本町一―二六―六A

TEL・(〇三)五九二四―二〇六五

◇URL・E-mail yurimaizumi@jcom.zaq.ne.jp

Homepage <http://maizumiyuri.jp/>

◇編集・発行・今泉由利・森岡陽子

◇印刷所・株式会社 桜創美